

第 1 日

国 語

(9:30~10:20)

注 意

- 1 検査開始のチャイムがなるまで開いてはいけません。
- 2 問題用紙は表紙を入れて6ページあり、問題は一から三まであります。これとは別に解答用紙が1枚あります。
- 3 問題用紙と解答用紙に受検番号を書きなさい。
- 4 答えはすべて解答用紙に記入しなさい。

受検番号	第	番
------	---	---

一 次の文章を読んで、あとの問い合わせに答えなさい。

「ほら、目が光つてゐるじゃろ。尻の方から網を近づけて……。」勇一郎に言われたとおり、エビのうしろから網を近づけていく。網を感じたエビは、すばやくはねて網の中に入りこんだ。そのまま引き上げながら笑いがこぼれた。「いちばん簡単な漁がこれじや。逃げたつもりで、つまりにくるんじや、エビは……。」勇一郎も笑つてゐる。カゴにエビを移して、小さな網をかまえ、懐中電灯の照らす先を見たとき、また光る目があつた。うしろから、そろりと網を近づけると、手に、¹それと分かる信号⁽¹⁾が伝わつてきた。網をそのまま引き上げ、エビをカゴに移した。身のキケン⁽²⁾を感じると、うしろにはねるようにして動くことしか知らないエビのシユウセイ⁽³⁾を利用した漁は、まるで、ひろつて歩くようなものだと思つた。「もう、カゴに半分ほどになつた。エビはもう、明日の朝と昼に食べる分あるぞ。」勇一郎が、カゴの中を懐中電灯で照らしながら言つた。ゆたかは、エビ漁をやめてしまふのがいやだつた。これまで勇一郎が網をずっと使つていて、自分はまだ二ひきしかつかまえていない。やつとおもしろくなつてきたところなのに、と思つた。「明日の夜は、ずっとやらせてあげるから。それより、これからアユをつかまえよう。」勇一郎は、ゆたかの□ありげな態度を見て、そう言つた。

「どうやつてつかまえるの?」「手でつかむんじや。」「えー?」あんなにすばやく泳ぎまわつてゐる魚を、どうやつてつかまえるのか、想

像もできなかつた。「ええか……、ほら。」そう言うと、勇一郎は、河原近くの水辺を懐中電灯の明かりで、サーッとなでた。アユが「ひき、水面にはね、河原にとびあがりそうになつて消えた。「夜のアユは、石の陰でじーっと眠つてゐるんじや。光をあてんかぎり、手でさわつても、ほとんど動かん。こうじや、こうやつて石の間を手でさぐつていくと、アユにさわる。それを両手で、サッとつかまえるんじや。」身ぶり手ぶり説明しだした勇一郎の話を聞いても、ゆたかは半信半疑だつた。

懐中電灯の明かりを消し、星の明かりだけしかなくなつた黒い世界で、川の中を手さぐりしている。ときどき、生き物が手にさわるが、その手をあわてて引つこめる。川瀬の音さえ昼間とちがつて聞こえる。ときどき、勇一郎を呼び、その返事を聞いて、気持ちを安心させている。勇一郎の返事がおくれれば、一人になつたのではないかとの不安がよぎる。

「捕つたぞ。」懐中電灯をつけ、その声の方に向ける。「水面を照らすな。」とたんに勇一郎の声。その両手に、大きなアユがしつかりとにぎられている。勇一郎は、そのまま河原に上がり、カゴにアユを入れ、水中にもどつてきた。「こわがつちやだめだぞ。川の中には、人間の手を食いちぎるようなもんはおらん。」瀬音の中に、勇一郎の声。そのとおりだと思つた。ゆたかは、水の中に尻をつけ、ひざをついて、手にさわるのはなんでもつかんでやろうと、石の間を手さぐりした。「こつちを照らして。」しばらくたつて、勇一郎が、アユをつかんで上がつていた。

水ゴケのついた石は、つるつるとしている。その石の間をまさぐつて

いるとき、手に何かさわった。尾ビレのようなものだ。ゆたかは、その

先を両手を使って、がつちりとにぎつた。たしかな手ごたえが手の中で
あはれている。にぎりなおそうとしたが、力をゆるめたすきに逃げられ

そうで、そのまま河原に走つた。川床のでこぼこに足をとられ、水の中
に^③コロ んだが、そのまま起き上がりつて河原に走つた。かけあがつたと
き、手の中でアユがすべり、ツルリと逃げた。あわてて懐中電灯をつけ、

アユを照らした。アユは、河原をはねて水辺に逃れようとしていた。そ
れを両手ではばみ、河原に^④ナ げ上げた。「つかまえたのか。」勇一郎

が上がつてきて、電灯の照らす先で、力なくあはれているアユを見た。

その手にも、アユがしつかりとにぎられていた。手にアユの感触がのこ
り、胸には、アユをにぎつたときから今までの高ぶりがそのままのこつ
ていた。魚をつかまえたときの、なんとも言えない満足感が、消え入り
そうにあはれているアユを見つめているうちに、ゆたかの胸にわき上が
つってきた。

(笛山久二 「ゆたかは鳥になりたかった」による。)

たかは半信半疑だったのですか。十五字以内で書きなさい。

5 ³ 水面を照らすな とあるが、なぜ水面を照らしてはいけないので
か。二十字以内で書きなさい。

6 次の文章は、第三・第四段落におけるゆたかの気持ちの変化につい
て述べたものです。空欄Ⅰにあてはまる最も適切な表現を、第三・第
四段落の中から二十字以内で抜き出して書きなさい。また、空欄Ⅱに
あてはまる最も適切な語句を、あとのアーチの中から選び、その記号
を書きなさい。

不安を感じながら川の中を手さぐりしていたゆたかだが、勇
一郎の言葉により、不安を打ち消すことができ、(I) と
いう気持ちで石の間に手を入れた。アユを両手でがつちりとにぎつ
たときの(II) 状態が続く中、アユを見つめるゆたかの胸に、な
んとも言えない満足感がわき上がつってきた。

ア 喜んだ イ 興奮した ウ あわてた エ ほつとした

1 ①~④ のカタカナにあたる漢字を書きなさい。
2 □ にあてはまる最も適切な語を、次のアーチの中から選び、
その記号を書きなさい。

ア 自信 イ いわく ウ 余裕 エ 不服

3 ¹ それと分かる信号 とあるが、この信号から、ゆたかは、どのよう
なことが分かるのですか。十五字以内で書きなさい。

4 ² ゆたかは半信半疑だった とあるが、どのようなことに対しても、ゆ

二 次の文章を読んで、あととの問い合わせに答えなさい。

文章力を身につけるためには、書くことが必要である。だからといって、ひたすら書き続ければよいのかというと、そうもいえない。自分のなかにあふれるほどの情報や知識、発想があり、泉のごとくわき出るテーマを豊富な語彙と表現力で書けるなら、書き続ける意味はあるかもしない。a 残念ながら多くの人はそれほど多才ではない。自分の引き出しの中にあるものをさらけ出すだけでは、①限界bがある。

何かを書きたい、書かなければならなくなるのは、たいてい新たな情報や知識を得るなど、外界からなんらかの刺激を受けたときではないだろうか。書きつけは、自分の外にある何かに触発されてつくられることが多い。書くためのうまいきつかけをつくることは、文章力を育む手助けになってくれる。

文章を書くうえで、あり余るほどの情報や知識はけつして無駄にはならない。一〇〇ある情報のうちの一〇を使って書くのと、一〇しかない情報をありつけ出して書くのとでは、文章の質もテーマの奥行きも違つてくる。文章を書くために必要な刺激を、自分からアンテナを張つて積極的に受けることが重要だといえるだろう。それが文章を書く下地づくりになる。よく肥えた土で育つた作物は、品質もよく、おいしい。やせた土壤に種をまき、いくら高価な肥料を与えたところで、よい土で育てられた作物にはかなわない。文章も同じである。

乏しい知識や情報しかない下地に、文章の種をまき、美辞麗句の肥

やしを振りまいたところで、内容のある文章になるものではない。それは、見かけ倒しの中身のない文章としかいえないだろう。

「書く」ことの裏返しは、実は「読む」ことにある。他人の文章を読むという作業は、文章力を鍛えるうえで、きわめて有効である。読むことで、新たな情報や表現方法が得られ、自分でもcという気持ちが喚起される。そればかりでなく、文章を分析し、解釈し、評価する力がつく。他人の文章を読んで感心したり、批判したりすることは、次に自分が書くときに生かされるものだ。

もし、読みにくい文章に出会つたら、どうしてわかりにくいのか、どうすれば読みやすくなるのかを考えたくなるだろう。すつきりとまとめ上げられた文章を目にしたら、自分もこんなふうに書いてみたいと思うだろう。知らない語句や慣用句に行き当たつたら、辞書をひいて意味を知り、新たな語彙としてストックすることもできる。読むことは、自分のなかにある文章力を熟成させるのである。

本でも、雑誌や新聞の記事などでもよい。できるだけ多彩なジャンルのいろいろな文章に触れてみよう。dこうした経験は文章力の幅を広げるのに役立つに違いない。

文章力を身につけることは、ただ文章のレベルを向上させるだけにとどまらない。文章を論理的に組み立てられるようになれば、ものごとを論理的に考えたり、説明したりすることも可能になるのだ。会社での会議の場などで、「考え方がまとまらない」と悩む人もいるのではないか。独創的な案を思いついたが、それを人前でうまく説明で

きないということはないだろうか。その提案が別の案と比べてどの点がまさつているか。現状のどのような問題点を④克服するのか。その案を実現するのに、どれほどのコストや手間がかかるのか、あるいは意外と効率的にできるものなのか。また、この案を実行することでデメリットは生じるのか。これら一つひとつの点をきちんと説明できれば、周囲の理解や賛同を得やすくなる。

ひとつの事がらを主張するとき、論理的に、順序立てて、うまく他人に説明できる力は、文章力そのものと言い換えることもできる。文章力を身につければ、論理力もおのずと備わるのである。そして、論理力は人を説得する力となる。

そうしてみると、社会で生きていくうえで、文章力がいかに大切かといふことがわかつてくる。私たちの生活は、会社でも家庭でも、日々、人のコミュニケーションで成り立っている。

自分の意思を人に伝え、また、人の意見に耳を傾け、相互に理解し、批判し合い、よりよい解決へとつなげる。その繰り返しのなかで、円滑な意思疎通を生み、効率的な意見交換の場をつくり、何よりあなたの存在を輝かせてくれるのが、文章力にほかならないといえるのではないだろうか。（渡辺富美雄編「〈入門〉日本語文章力」による。）

- 1 ①～④の漢字の読みを書きなさい。
- 2 a にあてはまる最も適切な語を、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア しかし イ だから ウ あるいは エ なぜなら
 b にあてはまる適切な表現を書きなさい。

- 4 乏しい知識や情報しかない下地とあるが、それを筆者は何にたとえていますか。第三段落までのなかから、五字で抜き出して書きなさい。
5 こうした経験とあるが、それはどのような経験を指していますか。

三十字以内で書きなさい。

6 次の表は、この文章を内容からI～IVの四つのまとまりに分け、それぞれの要点をまとめたものです。この表のⅢにあたる段落の番号を、すべて書きなさい。また、空欄cにあてはまるIの要点を、四十五字以内で書きなさい。

IV	III	II	I	まとまり	要 点
		文章力を鍛えるためには、他人の文章を読むことが有効である。	文章力を身につけることは、論理力を備えることにもつながる。		文章力は、コミュニケーションを成り立たせるために大切なものです。

三 次の文章を読んで、あとの問い合わせに答えなさい。

むかし、唐の絵かきに戴嵩だいそうといふあり。牛をえものにてかく事上手なり。ある時角をふり尾をたてて、牛どものたかふをかく。「しほうるはしくいできたりと思ひて、人々に見せあへり。¹」その後牛つかふ小童こわらわの、野がひにいでたるにこの絵を見せ、「汝ななめが朝夕つかふ牛に、よく似たるか。」²と、いひて問ひし。時、牛かふ小童、これをみて笑ふ。「いかにとなれば、牛のたかふ時は、尾をたてずして腹に尾をつくるものなり。この絵は尾をたてたれば、あやまりなり。」といひし。戴嵩おどろき、げにもと感じ、その絵をやぶりたり。まことに名人は、何事によらず戴嵩のごとくありたきものなり。戴嵩ほどの牛かきなれども、まことの牛に手なれぬ事なれば、あやまりもやあるらんと、朝夕なる牛飼ひの小童に見せたるは、名人の戴嵩なればこそ。(「私可多咄」による。)

(注) えもの = 最も得意とする物事。 一しほ = ひとりわ。

小童 = 子ども。 野がひ = 野に放し飼いにすること。
げにも = なるほど。 あやまりもやあるらん = まちがいがあるだろうか。 なるる = なじんでいる。

- 1 この文章を内容から前半・後半の二つに分けるとすると、どこで区切るのが適切ですか。後半のはじめの五字を抜き出して書きなさい。
2 見せあへりのひらがなの部分を、現代かなづかいで書きなさい。

3 いひて問ひしの主語はだれですか。次のア～エの中から適切なものを探び、その記号を書きなさい。

ア 戴嵩 イ 人々 ウ 小童 エ 筆者

4 この文章において、筆者は、戴嵩の二つの行動から、戴嵩を名人であると述べています。戴嵩の二つの行動を、それぞれ二十字以内で、現代の言葉で書きなさい。